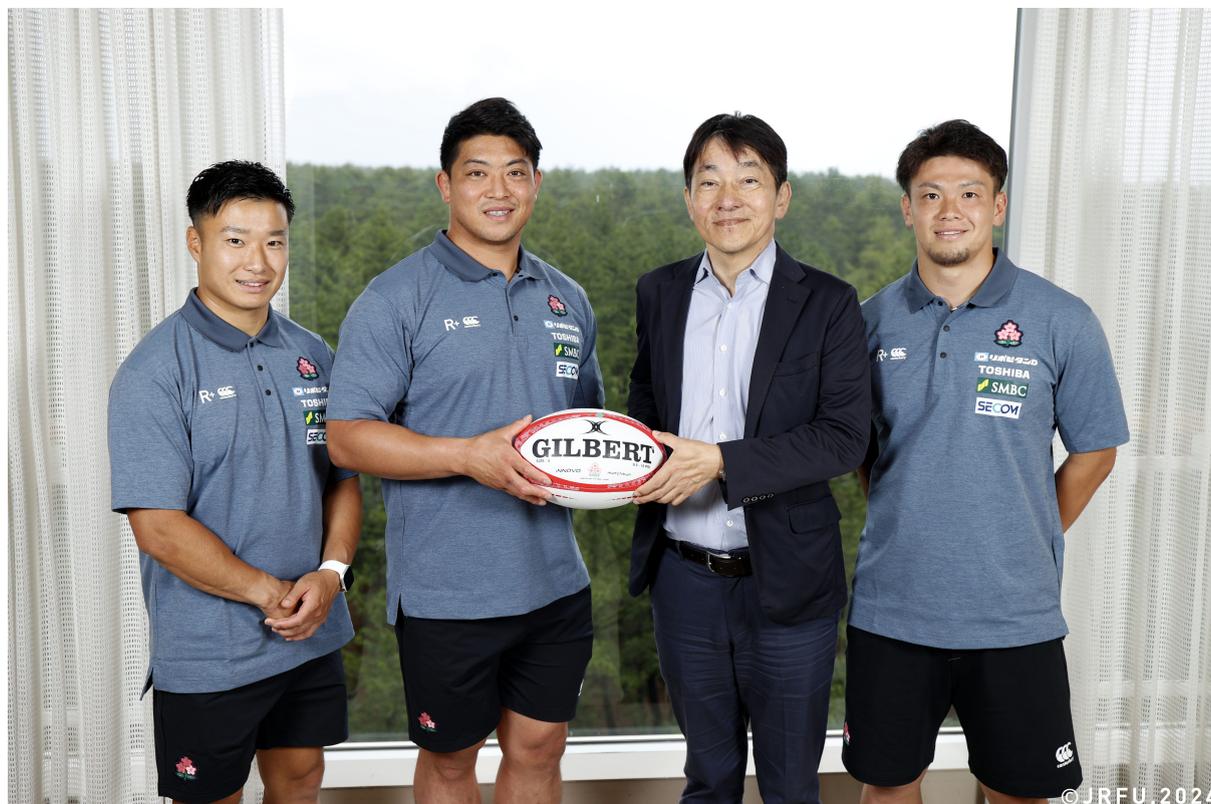


ラグビー日本代表対談

第一部「新しいラグビー日本代表とスピードの重要性」



左から、齋藤選手、坂手選手、代表取締役社長 安井豊明、根塚選手 / Photo: Atsushi Tokumaru

新しいラグビー日本代表とスピードの重要性

— 司会進行を務めさせていただきます小熊と申します。

(株) ヒト・コミュニケーションズはラグビー男子日本代表のオフィシャルスポンサーを務めており、世界で戦う日本代表チームを企業パートナーとして支援しています。今回は2024年6月に新たな日本代表チームに選出された坂手選手、齋藤選手、根塚選手をお招きしまして、代表取締役社長の安井豊明と選手の皆さんが対談をさせていただくなかで、新しい日本代表チームが今年の強豪国との試合にどのように臨んでいくのか。さらには日本ラグビーの未来や社会全体への貢献、ビジネスへの拡がりなどもお話ししていければと思っています。

今年の日本代表チームは、イングランド戦を皮切り強豪チーム相手の試合が8試合も組まれています。これからのビッグマッチに向けて、新しいチームとしても個人としてもこういった部分を打ち出していきたい、というイメージはお持ちですか。

<坂手選手>

今年マッチメイクされている試合では、常に勝利を目指さないといけないと思います。善戦で終わっていいわけではないですし、国と国とのテストマッチでは世界ランキングも関わってきます。日本での試合はメディアを通じてたくさんのファンに見てもらえるチャンスでもあるので、日本のラグビーを盛り上げていく上ではすごく大事な要素だと思っています。

日本代表が強豪国も含めた大事なテストマッチをこれほど多く組めるようになったのは、日本のラグビーが少しずつ成長した証だと思います。なかでも、本当に強いオールブラックス（ニュージーランド）だったり、イングランドだったり、フランスだったり、そういう世界のトップ8に入ってくるチームと定期的に試合ができることは非常に大事で、自分たちにとってはチャンスです。そこに向かってエディー・ジョーンズヘッドコーチ（HC）が打ち出した「超速ラグビー」を理解した上で臨めたらなと思っています。



坂手選手 / Photo: Atsushi Tokumaru

強豪国と試合が組めるような日本代表であり続けたい

— 安井社長は高校、大学時代にラグーマンとして活躍され、現在は企業の代表者としてラグビー日本代表のパートナーを長く務めています。長年ラグビーを追いかけてきた目線で、今の日本代表の立ち位置をどう見ますか？

<安井社長>

昨年、フランスで試合を観戦させてもらった印象としては、チリのように第3勢力と言われていたような国が力を付けてきました。やはり、ラグビーが本当の意味でグローバルになっていくと強く感じました。その状況では、日本代表がテストマッチであっても少しでも負けるとランキングがぐっと下がってしまう。このプレッシャーがありますよね。

<坂手選手>

ランキングが下がると世界大会のドロウにも影響しますし、ティア1、ティア2（※）に入るような国とテストマッチを組んでもらえる環境になってきたので、この状況を継続したいです。現役選手たちが頑張ることで、ラグビーをしている子どもたちが将来日本代表を選ばれた時にも強豪国と試合が組めるような日本代表であり続けたいですね。

※ティア1、ティア2.....世界のラグビーにおいて最上位に位置する上位10カ国が「ティア1」。日本はこれまで「ティア2」だったが、2023年に「ティア1」が「ハイパフォーマンス ユニオン」として再編され、日本もその最上位グループに組み込まれた。

— 坂手選手の話にも出てきた「超速ラグビー」というキーワードが新しいエディターHCのテーマとして掲げられています。まだこれからチームとしてトレーニングで精度を高めていく過程だと思いますが、現段階の印象を教えてください。

<坂手選手>

例えば、セットスピードでも相手より速くセットすることや、どんどんボールを動かすスピードもそうです。全てにおいてスピード面で世界に勝っていくことを目指しています。そのためにも、ハードワークなどやらなきゃいけないことがたくさんありますが、日本人にはとても合ったラグビーなのかなと感じています。

<安井社長>

スピードを上げてやるためには、スペースを見つける判断だとか、敵が攻めてくる狙いを瞬時に判断するとか、いろんなものが求められてくると思います。そうじゃないと速くならないですよ。でも、きついことはきついですよ。そこまで速くするということは。



代表取締役社長 安井豊明 / Photo: Atsushi Tokumaru

今のハーフはタックルにも行かないといけない

— その判断のスピードを高めていく部分では、特に齋藤選手のスクラムハーフのポジションが重要になると思うのですが、いかがでしょうか。

<齋藤選手>

はい。やはり動きを速くすると同時に、判断も速くすることが理想的ですけど、そんなに簡単なことじゃないと思います。間違いなく、難しくてきつい場面が多くなるんじゃないでしょうか。

<安井社長>

齋藤選手のハーフっていうポジションは、年々難しいポジションになってきています。私の選手時代のハーフに比べて難しさは倍増している印象です。だから本当にすごいと思います。言ってみれば、フォワードとバックスの両方の役割ですよ。

<齋藤選手>

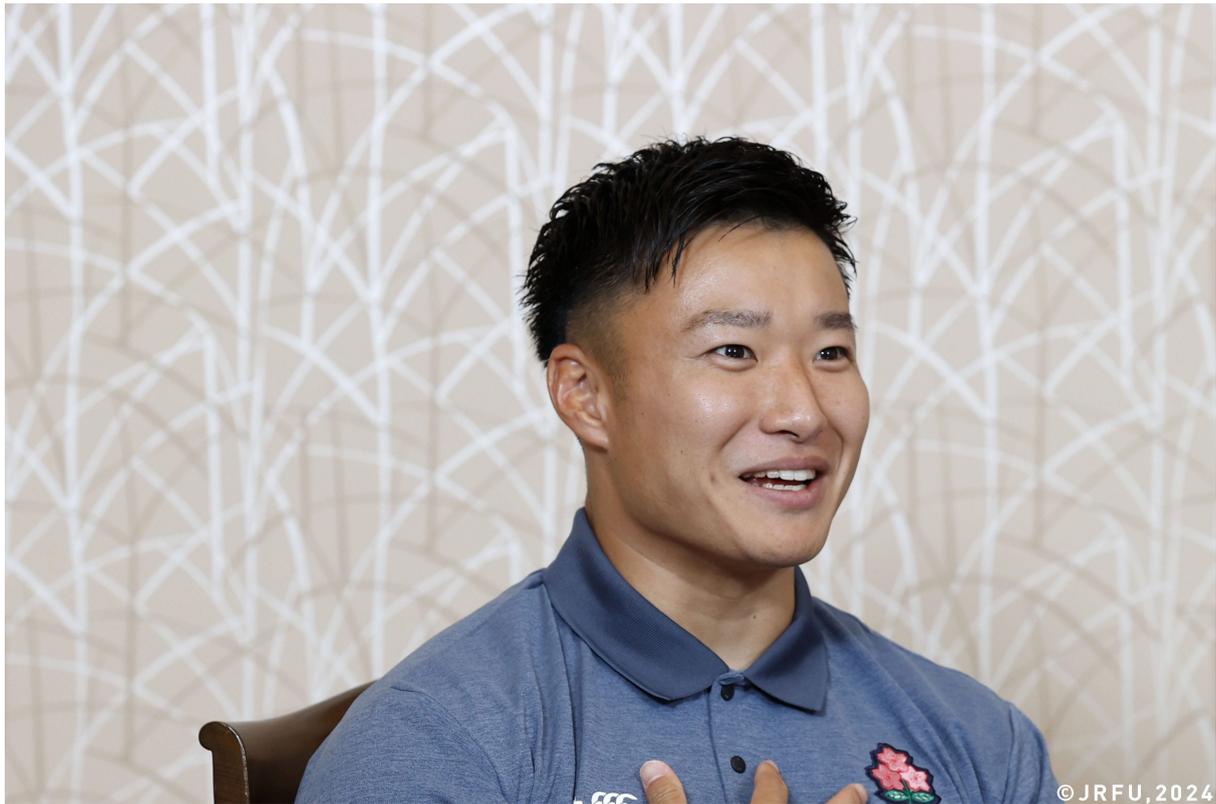
そうですね。そこに速さが求められるとなると、やはり大変なポジションだと思います。

<安井社長>

スピード上げるのも落とすのもハーフの判断次第です。大変なポジションだけど、試合中に両チームの動きをずっと近いところで見ることができる立場ですから。誰よりもよりもラグビーに詳しくなるといいますよ、ハーフのポジションをやっていると。

<坂手選手>

大変ですよ、今の9番は。以前はパスを出すことが主な役割でしたが、今のハーフはタックルにも行かないといけない。ディフェンスの一人なんです。僕らがラグビーを始めた頃は、9番にはタックルさせるな、でしたから。でも、今となっては9番がメインでディフェンスしてもらおうポジションでもあるので、体は大きくない選手が多いですけど、そこに行くメンタルも持ち合わせている必要があると考えると、やっぱりすごく大変なポジションだと思います。



齋藤選手 / Photo: Atsushi Tokumaru

<齋藤選手>

どこかでペースダウンなど緩急をつけることも考えなければ、ずっとは走れません。確かにきついです（笑）。

<安井社長>

短距離走とマラソンの連続ですからね。

<齋藤選手>

そうですね。試合中、止まっていることはほとんどないです。でも、走り続けるとたまにトライを奪うチャンスも巡ってきます。

<安井社長>

モールの中から抜け出してトライとかね。そういえばリーグワンの準決勝で抜け出してからのいいトライがありましたね。

<齋藤選手>

はい、結果的にはビデオ判定でノートライになってしまいました（笑）。

経験を重ねるからこそ可能になるスピード、ということもあると思う

— 根塚選手は代表候補選手が集まった6月の菅平合宿からエディーHCの薫陶を受けたり、実際にアドバイスを受けたりもされているかと思います。新しい日本代表でアピールしたい部分はどこになりますか。

<根塚選手>

僕はどちらかというタイプですが、自分で自信を持って言えるのはスピード、あとは思い切りの良さは、自分のいいところかなと思っています。エディーさんの掲げる新しい「超速ラグビー」をするにあたって、みんなが横一線、同じところからのスタートです。チャンスを広げるためにもどんどん自分でたくさんの映像を見たり練習したりして、一つでも世界の強豪相手の試合に出られる可能性を広げていきたい。坂手さんや直人さんみたいに、いずれ世界の舞台に出場するためにも、経験値を積めるように頑張りたいなと思っています。

— スピードや速さと言いますと、若い選手のほうが有利というように一般的に受け止められるとも思います。一方で、経験を重ねるからこそ可能になるスピード、ということもあると思うのですが。

<安井社長>

判断のスピードで難しいのは、やはり追い込まれた時とかビッグマッチとかプレッシャーがかかる時ですね。経験が積み重なると不確実な要素が多い中でもリスクの判断が早くなる。これはラグビーも仕事も一緒だと思いますよ。日本代表の選手の皆さんはそれを高いレベルで意識しているのがすごいと思います。

第二部 「若い人材をチームに活かす環境と経験の価値」



根塚選手 / Photo: Atsushi Tokumaru

ベテランの人と若手の人のいい架け橋になれる

— 今回、新たに代表に入った選手もとても多く、練習パートナーも含めると大学生が何人も選ばれています。経験のある選手の皆さんが合宿や練習で若い世代に対してどのように接して、チームに戦力として取り込んでいくのか。初代表や大学生のメンバーとの合宿でのコミュニケーションや心掛けていることを教えてくださいませんか。

<坂手選手>

代表合宿に呼ばれる選手は、本当にその能力があってコーチ陣がピックアップした選手ですので、年齢やキャリアはあまり意識しすぎず、若い選手たちもベテランも本当にフラットだと思っています。でも、何か悩んでいることがあれば話を聞きたいですし、まずは一緒に輪に入って、みんなでチームを作るというのが一番大事だ

と思っています。前回、エディーさんが指揮した2015年の大会以降、2019年大会、2023年大会と選手は入れ替わりましたけれども、いろんな選手たちと話してみんなが代表の価値だったり、代表の良さだったりを理解した上で、力を100%出せる環境にするのもベテランたちの仕事のひとつだと思っています。

<根塚選手>

自分は25歳と中間の世代なんですが、キャラ的にも人と喋るのが好きなんです。今回は事前の菅平合宿からチームに入っているんですけど、そこでも喋りまくって年下の大学生にも舐められたりしています（笑）。ただ、坂手さんとも出会ってすぐに距離感を一気に縮めましたし、良くも悪くも舐められてる、と言われるかもしれないぐらいのスピードで距離を一気に詰めるよう心がけています。

<坂手選手>

根塚は30分で距離を詰めたな。本当に30分で。超速でした（笑）。

<根塚選手>

自分あんまり物応じせず喋りかけられるタイプだと思うので、チームを一つにまとめる、チームを一つの輪にするところで言うと、会話の部分ではチームのためにサポートというか、フラットにしやすい立場なのかなと。年齢的にも、ベテランの人と若手の人とのいい架け橋になれるんじゃないかなと思っています。



左から、根塚選手、齋藤選手、坂手選手、代表取締役社長 安井豊明 / Photo: Atsushi Tokumaru

知識を知恵に変えてほしい

— 今回は事前の菅平合宿から数多くの大学生も日本代表合宿に参加したことはどう思われますか。

<坂手選手>

若い選手たちにとってはすごくチャンスですよね。僕も大学3年生か4年生の時かな、エディーさんに何度か合宿に呼んでいただいて、トップレベルの人と一緒に過ごして練習できたことが、今となってもすごくいい経験でした。今回招集されている彼らは実力を持って選ばれていて、このまま成長していくと日本のラグビーがもっと強くなるんじゃないかという期待もあります。そういう意味でも若い子たちと一緒にプレーするのは嬉しいですし、いい経験にしてほしいと思っています。

<齋藤選手>

僕も正代表ではなくてNDS（代表予備軍）として大学生の期間に代表チームに呼んでもらいました。その時に代表キャップ取得とはならなかったんですけど、その環境でプロの選手が練習場でどういう準備をしているのかなどを実際に学びました。

ラグビー面でも、大きい選手、速い選手に目が慣れたりして間違いなく成長します。今回参加している大学生は正代表として招集されている選手も多いので、その環境で代表キャップを取りに行くことは、とてもいい経験になるだろうなと思います。

— 安井社長から見て、組織のなかで若い人材に期待することは？

<安井社長>

これから若い人材の皆さんにぜひ考えてほしいのは、知識を知恵に変えていってほしいということです。情報を実際に仕事に使えるようになるには知恵が必要です。それにはやっぱりいろんな失敗や壁に直面することも含めて経験が必要だと言えるかもしれません。スポーツでも仕事でも目の前に大きな壁が出てきた時に、そこで思い切ってぶち破ろうとする姿勢があると、先輩や上司はその若手にうまく壁を越えさせてやろうと手助けしてくれるはずですよ。日本代表の皆さんが話していたように「若い力」をいかに組織の力に還元するかということも学生時代にラグビーをやってきて学んだことのひとつなのかなと思います。自分も若いビジネスマンの時はあまり感じていませんでしたが、役職が上がり責任が増してくる度にラグビーで学んだことが生きてくるようになりました。

第三部 「日本ラグビーの未来と社会への還元」



代表取締役社長 安井豊明 / Photo: Atsushi Tokumaru

リーグワンが国際試合のレベルに近づいている

<安井社長>

日本がラグビー先進国になっていくためには、国内をグローバルにしなければいけない時期が来ているな、という印象があります。そういった意味では、当社も支援させてもらっていますが2023-24シーズンのリーグワンは相当に充実したリーグだったと思います。明らかにレベルが上がってきているので、外国人選手の目の色が毎年変わってきている。僕は本当にいい感じになってきたなと思うので、その成果が今回のラグビーの代表のシーズンで、いい形で出てくるんじゃないかな、という期待をさせてもらっているところです。

— 3年目のリーグワン全体がレベルアップしたことが、今年の日代表の8試合にどのようにつながっていくのでしょうか。齋藤選手いかがでしょうか。

<齋藤選手>

リーグワンでは毎試合毎試合、僅差でタフなゲームが続いているので、一つのミスで勝つか負けるかという緊張感の中でプレーできたことは、一選手として本当に大

きな経験です。代表チーム同士のテストマッチでも、一つのミス、安易なプレーが勝敗に関わることを考えると、リーグが国際試合のレベルに少しずつ近づいているんじゃないかなと思います。

— 根塚選手はどうでしょう？

<根塚選手>

僕がデビューしたのは3年前、ちょうどトップリーグからリーグワンに切り替わる時だったんですけど、シーズンごと試合ごとにコンタクトの強度も上がっています。もちろん、スピーディーさの部分や一つ一つのスキル、ディテールといった全てが毎年毎年上がってきているのは確実にみんなが感じていると思います。

<安井社長>

周囲の反響で実際にそういう印象がありますか。

<根塚選手>

僕の周りで試合を見に来てくれる人も、僕ら自身も緊張する試合が多くて、毎試合気が抜けない戦いばかりです。点差も僅差による試合が多いので、見に来る友達もやっぱり今年はどちらが勝つかわからない試合が多かった、とよく言ってくれます。プレーしている側としても見る側としても、すごくハラハラドキドキするし、いい経験を積める試合が多くなってきているのかな、というのは感じています。



坂手選手 / Photo: Atsushi Tokumaru

短いところで集中し、成果や効果が出るようにやり続けるというのが本当のハードワーク

— 進化を続けるリーグワンですが、今回の新しい日本代表では「再構築」という言葉もキーワードとして出ています。逆に、これまで培ってきて変えてはいけないもの、もしくは継承していくべきこともあると思います。長年に渡って代表を経験してきた坂手選手にお聞きしたいのですが、これからの日本ラグビーにおいても、これまで良かった部分で引き継いでいきたい部分、継続していきたい部分はあったところになりますか？

<坂手選手>

ハードワークをする、というところは確実に継承していかないといけないと思います。その方法が違ったりとか、個人だったり、チームとして目指すラグビーによって変わるとは思いますが、どのプレーを選択したとしても、みんながハードワークし続ける、全力で追求し続けるというのは、継承していかなければいけないかなと思います。

<安井社長>

僕は、ハードワークをしようとか、社員とかには言わないです。言いたい場面もたまにあったりますけどね（笑）。

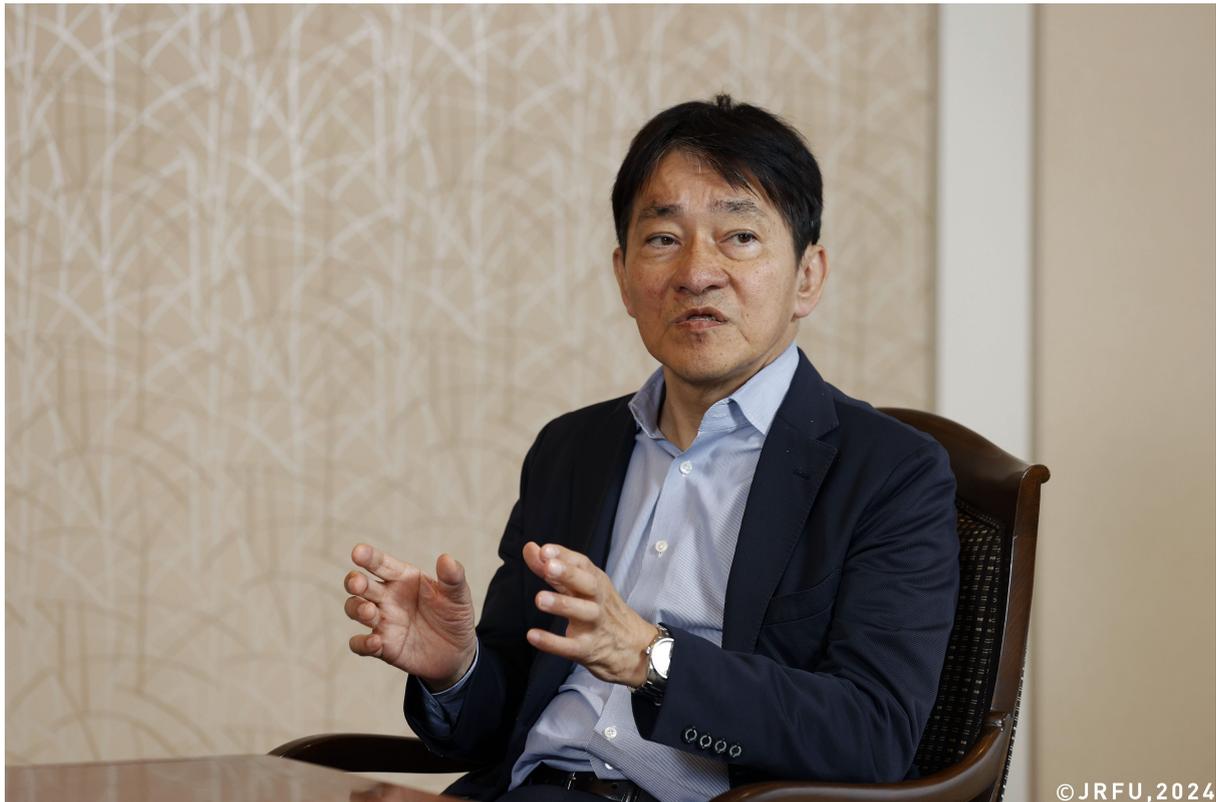
<坂手選手>

ハードワークって、長くやることだけがハードワークというわけではないです。短い時間でもどれだけ考えて、無駄な時間を過ごさないかがすごく大事な気がします。仕事で言えば、ただ単に残業したりとか、僕らもただ練習を長くやるというわけじゃなくて、短いところでパンと集中して、そこに必要な成果や効果が出るようにやり続けるというのが本当のハードワークだと思っています。

— 根塚選手はこれまでの日本代表から、こういった部分を学びたい、もしくは、参考にしたいというのがありますか？

<根塚選手>

そうですね。僕はあまり試合で緊張したりしないタイプなんですけど、初めて日本代表のジャージーを着た時は経験豊富な田村優さんや立川理道さんたちから「アップ中も笑顔一つないな」と言われて（笑）。日本代表ってこんなにも重たいものを背負って戦わなきゃいけないのか、というのを感じました。その意味でも、ビッグマッチを戦う中でのメンタルの重要性をこれから日本代表でも学びたいです。そのための準備だったり、普段の練習でやっていることをどれだけゲームで同じように遂行できるかということも含め、今回の合宿や代表戦を通して、自分の経験値を上げていければいいかなと思っています。



代表取締役社長 安井豊明 / Photo: Atsushi Tokumaru

思いを抱けるチームがあるから、ここに住むという方もいる

— 安井社長、これまでラグビーをずっと応援されてきた立場、もしくは見続けてきた立場から日本ラグビーの良さというのは、どういったところで感じますか？

<安井社長>

日本のファンが一番求めているのは、果敢にチーム力で相手の強力な個々の力に対して勝負する。「柔よく剛を制す」という世界が見たいんだと思うんですよね。サンウルブズ（※）の時に、日本のプレーヤーたちがやられても、やられても、立ち向かっていくっていうね、そういうところは、日本ラグビーの一番いいところだと思う。スポンサードとしている立場からも、「頑張れ」って心の底から感じますよ。そこがやっぱり、日本ラグビーの一番の魅力だと思う。

皆さんが感じているように日本ラグビーの精神はフォアザチームにあると思います。しかしながら、最近はそれとは逆に利己的な主張をする傾向も見られます。例えば「代表チームでアピールしたい」というコメントを聞くことがあります。です

が、それだけで組織の中で頑張ることは難しいのではないかと。僕はやはり「誰かのためにやる」という要素がないと、人間は自分のためだけには生きられないと思っている。みんなのためにとか誰かのためにといったところが加わって、自分の利益と他者に対する利益も含めて最後にはバランスがよくなっていく。高度な組織は最後はそうなると思っています。絶対に。

だからこそ、それを目指して会社経営とかチーム経営をやっていくべきだなと。不思議なことに、自分のためだけに頑張ると自分に返ってくるのが殆どない。でも、他人のために頑張っていることも含めてやっていると、自分にふっと回って返ってくる。

※サンウルブズ.....日本代表選手や候補選手たちの強化の場として、ラグビーの世界最高峰リーグ「スーパーラグビー」に参戦するために結成された日本チーム。ヒト・コミュニケーションズがオフィシャルチームスポンサーとなり、2016～2020年のスーパーラグビーに参戦した。

<坂手選手>

本当その通りだなと感じます。「利己」というのは、自分の利益を求めることも、もちろん大事だと思うんですよね。自分が上手くなりたいから、これだけ頑張れる。でも、そこに家族がいたり、ファンの皆さん、僕らが所属しているチームや会社がある。そういう人たちがラグビーを通して楽しんでもらえるか、熱くなくてももらえるか、そういう感情を持ってくれるとしたら、そのことも僕たちにとって同じように幸せなことですよ。

<安井社長>

そういう思いを抱けるチームがあるから、ここに住むというファンの方もいるのですね。

<坂手選手>

僕が普段所属するパナソニックワイルドナイツは、もともとは群馬県太田市が練習拠点でした。そこから、埼玉県の熊谷市に来てもう3年経ちましたけど、「埼玉に来てくれてありがとうございます」といった声を最近よくいただきます。インスタグラムのストーリーやメッセージでも送ってくださる方もいます。「埼玉にはいろんなプロスポーツがあるんですけど、それを今リードしているのはワールドナイツ

です」という声もいただきますし、いろんな声をいただくことが自分たちのためにもなるんですよね。

自分のためにそういう声があって、またエネルギーをもらって、またそれを皆さんにプレーで返していく。そういうサイクルがあると思うので、本当にその考え方は大事だと思います。自分たち一人一人が頑張らないといけないけど、それが結果、チームや地域のためになっているということを思いながら、今の安井社長のお話を聞いていました。

<安井社長>

ありがとうございます。



左から、根塚選手、齋藤選手、坂手選手 / Photo: Atsushi Tokumaru

「これが日本のラグビーだ」というのが、少し形が見えてくる時がようやく来た

— 改めて最後に、日本ラグビーがここから再スタートを切る上で、チームとして、ご自身、どんな景色をこれから目指していくかをお聞かせください。

<坂手選手>

僕は初めて代表に呼ばれた当初は、去年は入れなくて今年はまた呼んでもらってと、嬉しいと悔しいを繰り返していました。今回のエディーさんの新しいジャパンラグビーにも本当に早く馴染んで頑張りたいなと思います。そして、次の2027年の大会にも、やっぱり日本代表として出たいです。今の日本代表に出ることもとても嬉しいですけど、世界大会の時に日本代表の一員としてプレーしたいというのが僕の小さい頃からの夢でもあります。そこでまた経験値を増やして、これからの日本のラグビーに貢献していきたいという強い思いで頑張っていきたいです。

<齋藤選手>

まず、チームとしての目標は2027年の大会で世界のトップ4に入ること。トップ4を目指すならば、ここから自分たちはどうあるべきなのか、そのターニングポイントが今だと思います。このチームでプレーできて、自分たち次第で今後の日本代表の目標に到達できるということにすごく幸せを感じています。去年の大会には出場できませんでした。次も必ず出たいと思っていますし、日本代表の成長とともに僕自身も一個人として成長し続けて、チームとしての目標のトップ4もですし、僕もワールドクラスの選手になりたいと思います。成長し続けたいです。

<根塚選手>

日本ラグビーもそうですし、日本代表もそして自分自身も、本当にリミットはないと思っています。限界を作らず、自分たちにとって何が最善かを考えながら常に成長していきたいです。これからラグビーを始めていく子どもたち、もっとラグビーをしたい人たちのためにも、日本ラグビーは強いぞ、日本のラグビーが世界を席巻しているぞ、というところを見せていきたいです。そのためには本当にここからハードワークし続ける日々のなかで毎日を戦いながら、テストマッチを戦いながら、世界大会に向かっていきたいと思っています。

— 安井社長としては、今お話があったように世界に向かって組織としても個人としても大きな目標を追求する日本代表をどのようにサポートしていきたい、応援していきたいとお考えでしょうか。

<安井社長>

「これが日本のラグビーだ」というのが、少し形が見えてくる時がようやく来たのかなと感じています。屈強な相手に「スピード」と「利他の精神」で何度も立ち上

がり向かってゆく。大男に優位なラグビーが身体的に日本人に適合しているスポーツかどうか考えてしまうことも多いけれども、そこを果敢に挑戦していくのが日本ラグビーだと思います。そのスタイルを世界のラグビー界に認めさせるところまで来ているのではないのでしょうか。それはラグビー界だけでなく、日本という国が世界でどう競っていくのかという可能性を、日本の皆さんに示してくれているからこそ、我々はラグビーを支援したいと思っています。坂手選手の時代から、齋藤選手、根塚選手の時代で、「これが日本のラグビーなんだ」という形と雰囲気が見えてくると思いますし、そして世界を席巻するという夢に向かって支援をしてゆきたいと考えていますので、ぜひ頑張ってくださいと思います。ありがとうございました。

<坂手選手・齋藤選手・根塚選手>

ありがとうございます。

<安井社長>

応援していますので頑張ってください。ありがとうございました。